1997年度　修士論文要旨

『ハーメルンの笛吹き男』

——ツックマイアーとエンデの鼠捕り男伝説——

奥田紀代子

日本でメルヘンとして有名な『ハーメルンの笛吹き男』の話は，ドイツでは『ハーメルンの鼠捕り男』(Der Rattenfänger von Hameln) と呼ばれ，伝説に分類されている（以下本論ではこの話のことを Rattenfängersage という言葉を用いて鼠捕り男伝説と呼ぶことにする)．これは1284年6月26日ハーメルンで起きた130人の子供の失踪事件という史実に，16世紀後半笛吹き男による鼠捕りのモティーフが加わって成立したものである．しかし子供の失踪の原因は謎であり，これまで様々な解釈が試みられてきた．他方この鼠捕り男伝説はゲーテやラーベ，ブレヒトなど多くのドイツ文学者たちの創作意欲をかきたててきた．最近ではツックマイアーとエンデがこれをモティーフとした作品を発表している．本論の主眼は，彼らの鼠捕り男伝説に対する見解，各作品の鼠捕り男像及び主題の3点を比較検討し，その結果を考察することにより，現代作家が描く二つの「鼠捕り男伝説」が体現しているものを明らかにすることにある．

ツックマイアーは1975年，戯曲台本である『鼠捕り男—寓話』(„Der Rattenfänger. Eine Fabel.“) を発表した．彼はこの本の後書きや初演の際のインタビューの中で，鼠捕り男伝説は自分にとって自由な発想が可能な文学的素材であったと述べている．一方エンデは鼠捕り男伝説が人間の真理を包含する素材であると認識し，1960年代からの長い熟考の末，1993年『鼠捕り男—ハーメルンの死の舞踏』(„Der Rattenfänger. Ein Hamelner Totentanz.“) を完成させた．両者は共に鼠捕り男伝説の歴史的解釈には重きを置かず，このモティーフを構成上の骨組みとしてのみ扱い，あとは自分の本領において肉付けを行っている点で共通する．しかし前者がこれを自由な創作の足場と捉えているのに対し，後者は傾聴

すべき警鐘の具体化と捉えている点で相違する．

ツックマイアーの作品中の鼠捕り男である「まだら男」(Bunting)は，迫害され放浪生活を余儀なくされてきた人物で，常に自分の身を守る術を心得ている変幻自在の自由人である．一方エンデの「笛吹き男」(Spielmann)は，笛でのみ意志を表現し，ハーメルンの救済という使命のためには自己犠牲をも厭わぬ，極めて純粋な超人的存在である．

またツックマイアーの作品の主題は「自由」である．彼はまだら男にこの抽象的概念を託し，その両面性を描出しようとした．これに対しエンデの主題は「経済社会」である．彼は人間を加速度的にエネルギー消費に向かわせる社会制度から抜け出る道を各人の自覚に求め，作品の結末を悲劇的に締め括ることで観客に危機感と焦燥感をもたらそうとした．

ところでツックマイアーは，反ナチス的言動や母方のユダヤ人の血統のために長い亡命生活を強いられ，様々な過程を経て1958年以降スイスに定住した．このような経歴はまだら男のものと類似しており，さらに『回想録』(1966)をみると，彼がその苛酷な運命に屈することなく，まだら男のように折々で順応性を発揮して，自由と共に気楽な人生観を獲得したことが読み取れる．それゆえにまだら男はツックマイアーの化身であると考えられ，彼が作品中でまだら男に自由であるがゆえの苦悩を負わせつつも最後には「自由万歳」という姿勢を取り戻させたのは，老齢となった作者がこれまでの自分の生き方に，改めて肯定的評価を与える意図があったからではないかという推測が成り立つ．その一方でツックマイアーが亡命先のオーストリアでのファシズム体制に関心を持たず，自分の身辺の境遇のみを気に掛けその国家の「安全性」を信じ切っていたことから，彼の歴史感覚や社会感覚の欠如ぶりを批判する意見がある．この批判の妥当性はともかくとして，彼のこのような態度は皮肉なことにまだら男に誇張をもって反映されているように思える．作者がこの作品で自由を主題にしたとはいえ，結末で自由を求めて去って行くまだら男の姿に少なからぬ反感を抱かせてしまうその作風は，都合の悪いことに目をつぶって「幸福」な晩年を得た作家に課せられた，創作能力の限界の一端を示しているのではなかろうか．とはいうもののやはり

あのナチス時代を生き抜くことは並大抵の苦労ではなかったに違いない．数々の紆余曲折を経てようやく得たスイスでの富と安らぎが，この作品に切れ味の悪さを残してしまっているのだとしても，我々はそれをツックマイアーの「現状への満足感」の表れだと受けとめて，共に喜ぶべきなのかもしれない．

他方エンデは作家として「こころをもってこころに語りかける文学」を志してきたが，これは言葉を持たず笛で人間の意識に働き掛ける笛吹き男に共通する姿勢である．また不可視的な世界の存在を信じていたエンデは死を前にしても生に執着しなかった．この内面的な強さもエンデと笛吹き男に共通するものである．他方エンデの文学を，現実逃避主義で政治回避であると非難する声もある．これに対してエンデは，芸術は直接世界を変革する必要はなく，むしろ個人の意識の変革を通して最終的に人間すべての問題につながっていくものだと反論している．彼がここで強調している「意識の変革」とは既に述べた「こころ」に訴えることにほかならず，エンデはツックマイアー同様自分の化身ともいえる笛吹き男を登場させたこの作品が，「世界の変革」の布石となることを信じたかったに違いない．またエンデは自分の本が分析されたり解釈されることを望まず，体験されることを願っていると繰り返し述べている．この言葉の背景には既に，彼の Geist の世界への傾倒が見え隠れしており，この作品においてはその傾向がとりわけ顕著であったと思われる．

ツックマイアーとエンデ．この二人は各々の「鼠捕り男」を擁して，二つの全く異なる「鼠捕り男伝説」を完成させた．1975年と1993年という約20年間の隔たりを経て同じ素材を使って書かれたこれらの作品には，「現状重視の世界観」（ツックマイアー）と「Geist 重視の世界観」（エンデ）という相対するものが体現されていたといえるのではなかろうか．

KHM15「ヘンゼルとグレーテル」考察

——版の比較とその類話をもとに——

金　城　朱　美

グリム兄弟は初稿と呼ばれる1810年から決定版と呼ばれる1857年版に至るまで『子供と家庭のメルヒェン集』の改版に従事してきた．さらに『子供と家庭のメルヒェン集』の選集として出された『小さな版』が1825年から1858年まで10版出版されていたことと合わせて数えると，49年の間に19回も改版していたということになる．果たしてなぜ彼等がこれだけ改版する必要があったのか，という疑問が本論文の出発点になる．こうした疑問を解明すべく，実際に各版の比較をおこなうことにした．すなわち1810年版から1857年版の八つの版と『小さな版』の1825年版と1858年版の合計10版の比較をおこなった．『子供と家庭のメルヒェン集』に収められている211話すべてのメルヒェンを比較することは困難であり，本稿ではKHM15番「ヘンゼルとグレーテル」一話に限定した．

版の比較を行う際に，それぞれの登場人物の発言もしくは行動描写の移り変わりに焦点を当ててみた．ことに「ヘンゼルとグレーテル」に限っては，版を重ねるごとに父親は「優しく，子供思いだが弱気」になってゆき，母親の場合，最初に子供たちを森に捨てるのを提案するのは実母であったが，後の版ではこれを継母に書き換えている．このことはいわば母親の負の側面を継母に置き換えて，読者である母親からの反感を買わないようにしたのではないかと推測できる．男の子（ヘンゼル）は，どんな苦境に直面しても「泣かない，強い子」で，妹思いの優しい兄として描かれている．逆に女の子（グレーテル）はだんだんと泣き虫に書き変えられていくが，後の版では魔女（Hexe）を焼き殺す「勇気」を持ち，また動物（鴨）にまで気を使う「思いやりのある」女の子に成長していく．またこのメルヒェンに登場する魔女は，撞木杖をついていて，今にも死にそうなぐらい年老いた老婆で，痩せている．目の色は赤く，視力は弱いがそのかわりに動物並みの嗅覚をもっていて，そのため子供

たちをパンとケーキの家で誘惑しては，彼等を食べる人喰いである．これらの特徴から非人間的で，恐ろしい魔女が目に浮かぶだろう．しかしこれらの魔女の特徴は，改版にともなって次第に増えていったものであり，その結果「ヘンゼルとグレーテル」に登場する魔女が，ほかに魔女が登場するグリムのメルヒェン16話のなかで，最もその特徴が詳しく語られたものとなっているのである．

改版する度に登場人物の性格が特徴づけられていっただけではなく，その語り方にも変化が生じたことも重要である．彼等は，民衆に語られたメルヒェンを追及し続け，より„volksmündlich“な語り方を模索していた．そのためたくさんのメルヒェン集を参考にして，『子供と家庭のメルヒェン集』に収められたメルヒェンを再話したと考えられる．

その一例として「ヘンゼルとグレーテル」の場合，アウグスト・シュテーバーが再話した「卵ケーキのちっちゃなおうち」に大きな影響を受けていた，ということはハインツ・レレケの論文により，明らかになっているが，彼等が影響を受けなかった部分もあったということは看過できないだろう．例えばシュテーバーの版では，子供たちが魔女の家から帰宅したとき「両親が子捨てをしてしまったことに対し，互いに文句を言い合っていた」と書かれているものが，グリムの版では依然として「継母は死んでいた（決定版）」と書かれたままだったことが挙げられる．

シュテーバーの版に影響を受けたのはレレケが指摘したように，そのメルヒェンのもつ„volksmündlich“な要素だけではなく，このメルヒェンの蒐集者であるシュテーバーのメルヒェン観にグリム兄弟が賛同したからではないかと思われる．なぜならシュテーバーは『エルザスの民衆本』のまえがきで次のようなことを述べているからだ．

ひとつの時代のトーンは次第に弱まって消えてゆき，伝統的なカラーが消えてゆく．それは魔法の靴や七里靴，魔法のバネ，魔除けに関するものといった不思議なものが我々にとってなじみのないものになってしまったし，我々はそれらを取り囲んでいる意味を失ってしまった．こうして我々は今日の生活でこれらの事柄に別れを告げようとしているのである．しかし，書き残されたものとして，そして過去へ追いやられた時代の証拠として，これら（『エルザスの民衆本』に収められている）の格

言詩や韻文・歌曲，メルヒェンをもう一度我々の周りで蒐集し，その結果これらがエルザスの古い歴史のなかに書き刻まれ，愛しい死んだものとして，別の言い方をすれば文化遺産として残すことができるのである．グリムはシュテーバーのメルヒェン以外に17のメルヒェンを「ヘンゼルとグレーテル」を再話する際に参考にしていた．本論文では，そのうちの8話（ペローの「親指小僧」，シュテーバーの「卵ケーキのちっちゃなおうち」，ベッヒシュタインの「ヘンゼルとグレーテル」，ハーンの「四つ目の雌犬」，ツィンゲルレの「人喰い男」と「ファンゲン」，シュティーアの「3人の王女」とバジレの「ニッニッロとネッネッラ」）とグリムの版との比較を試みてみた．

こうして「ヘンゼルとグレーテル」の10の版を比較し，またその類話を比較した結果，次のようなことが言えるだろう．彼等は当時注目されていなかった語りの文学に注目することで，これに研究の価値を与え，忘れ去られつつある昔の事柄を忘れないようにするためにメルヒェン集を編纂し，後世に残そうと考えたのだろうと．彼等の再話したメルヒェンのなかには，古代ゲルマンの風俗や習慣，文化をかいま見るものが織り込められているのもそのためであろう．さらに当時まだ子供向けの文学がなかった時に，彼等は自分たちのメルヒェン集を子供たちに捧げて，その教育的効果を狙い，さらに芽生えつつある近代化の精神を育むのを手伝ったのであろう．それゆえ彼等のメルヒェン集は『子供と家庭のメルヒェン集』と名付けられたのだと思われる．

グリム兄弟は「ヘンゼルとグレーテル」のなかで，父・母・男の子・女の子・魔女（Hexe）をそれぞれ特徴づけ，いくつかの形容詞を付け加えたり，文を書き換えることによって，その語り方を„bilderhaft“にしていった．彼等のメルヒェンを„bilderhaft“にすることによって，読者あるいは聞き手に，「読む楽しみ」や「聞く楽しみ」を増すことに成功し，これこそ今日もなお世界中で飽くことなく読み継がれる文学となった由縁だと言っても過言ではないだろう．

オトフリートの福音書における代替格としての古高ドイツ語の与格

秋　山　智　子

現代ドイツ語で与格は，「ある人に」だけではなく，「ある人から」や「ある物で」も表す．古高ドイツ語でも，現代語と同様，与格は同時に本来の与格の機能（ある人に）の他に位格（ある時，所で）・奪格（ある人から）・具格（ある物で）の機能を持っていた．それは，格融合によって他の格の機能が与格に移ったからである．つまり，印欧祖語では八つの格があったのが，長い年月を経るにつれて，古高ドイツ語では五つの格に統合されたことによる．

さて，私はそこで，古高ドイツ語では代替格としての与格がどのように使用されていたのかについて，位格と奪格の代用としての与格を中心に，「オトフリートの福音書」を題材にして研究した．

まず，古高ドイツ語での位格の代用としての与格は，場所を規定する位格的与格（ある所で）と，時間を規定する位格的与格（ある時に）に大きく分けることができる．

「オトフリート」では場所の規定語として，位格的与格はしばしば前置詞をとらずに，動詞 *kliban* や形容詞 *festi* との結合で用いられている．同様に動詞 *gangan* と並ぶ *pad* の複数与格も本来は位格的なものだと捉えられる．また，副詞になったものもある．それらはまだ，場所的な意味と与格の語尾を持っている．

時間の規定語としても，位格的与格はしばしば単独で，あるいは現代語のように前置詞 *in* と並んで用いられる．複数与格 *herton* も時間的と見なされる．

その他に，不変化詞を付け加えることで，位格的与格の意味はよりはっきりとする．これらの不変化詞，特に *ana* や *inne* は動詞と密接に結び付いている．

所有の与格も位格的であると思われる．現代語と同様に，与格は身体の部分や付属物を表す語と関連して使用される．また，動詞 *sin* や *werdan* と共に使われる場合，与格は関心を表し，ある物がどの人にとって存在するのかを示す．

古高ドイツ語の与格はまた，奪格の代用としても頻繁に用いられている．これには，本来の奪格の意味で使われているものと，氏素性を表すもの，それに比較の際に用いられるものがある．

本来奪格は，ある行為がどこから出発するのかを示すものである．古高ドイツ語では与格が，動詞 *neman* やその合成語と並んで使われるとき，奪格の基本的な意味をまだ保っていると思われる．この場合，「ある人から奪う，取る」となる．更に与格が *int-* や *ir-* と合成された動詞と一緒に使われる場合にも，この意味は見出される．

素性や出生を表す場合，与格は *giberan* の過去分詞と共にある．由来を示すので，奪格にさかのぼると分かるのだが，「オトフリート」では少ししか見られない．また与格は *sin* と一緒に現れ，やはり素性を表すこともある．

比較の際にも与格は単独で使われる．その場合には与格は比較の対象を表す．与格は比較の出発点を示すので，ここでも奪格の基本的意味が捉えられる．しかし，古高ドイツ語ではすでに比較の時に *thanne*（英語では *than*）もよく用いられた．他に，*er* や *sid* の後でもこの与格は使用される．その場合には現代語と同様，「より前に」や「より後で」となる．

最後に，古高ドイツ語の与格は具格の代理もしていた．本来具格は，どんな手段によって動詞で示されている行為が実行されるかを表していた．古高ドイツ語では具格はまだ少し残っている．しかし与格もまた，それが随伴状況を示している場合にも，純粋に具格的な場合にも，古い具格の機能を大幅に引き受けている．

古高ドイツ語の不定形の言語史的研究

——「オトフリートの福音書」を中心に——

松　浦　智　美

この論文で私は「オトフリート」の不定形を言語史的観点から，ゴート語や現代ドイツ語と比較しながら分析してみた．

まず，不定形は次の3種類に分類される．すなわち，1）単独の不定形　2）名詞化された不定形　3）zu 不定形である．

「オトフリート」において，単独の不定形を支配できる語は，ゴート語のそれと比較すると，かなり限定されている．単独の不定形は常に zu 不定形（古高ドイツ語では zi 不定形）と競合しており，その結果単独の不定形の領域は徐々に狭いものとなっている．単独の不定形が保たれるかどうかは，不定形の主語とそれを支配する文の主語との関係にかかっており，その観点から単独の不定形を分類する．

単独の不定形が最もよく保たれているのは，両者の主語が一致する場合である．ここではまず，すでに古高ドイツ語で助動詞として機能している幾つかの過去現在動詞 mag, scal, muaz, tharf, kan, willu, gitar, 行為の開始を表す動詞 gistantan, biginnan 及び werdon が挙げられる．この場合不定形は支配的な語の補足語として機能している．現代語において後者の三つの動詞は単独の不定形とはもはや用いられていないが，助動詞は，今日でも定式的に単独の不定形と結び付いている．そして，次に運動の動詞 faran, ilen, gangan, queman, slihan がある．この場合不定形は補足語ではなく副詞的規定語と見なされる．これらの動詞は単独の不定形と並び zi 不定形と結び付くケースもあり，現代語において単独の不定形を支配できるのは gehen に限られる．また，単独の不定詞と唯一結び付く形容詞 giwon ist もここに分類される．

不定形の主語が，それを支配する文の主語と一致しない場合，不定形の主語は，ゴート語では与格や対格で表されるが，「オトフリート」では対格に限られる．この場合，不定形付き対格（Akkusativ cum Infinitiv）

が構成されるが，「オトフリート」のそれはラテン語やゴート語のそれとは一致しない．すなわち「オトフリート」の場合，対格は不定形の意味上の主語であると同時にそれを支配する動詞の直接目的語であり，一方ラテン語やゴート語ではそれに並び対格と不定形が一つのまとまりとして支配する語の目的語となる場合もある．さて，「オトフリート」でこの形式を構成できる語は意図を表明する動詞 senten, lazan, heizan, bittan, gilusten 及び知覚動詞 sehan, horen, irkennen である．知覚動詞の場合，元来不定形の代わりに現在分詞が用いられていた．両者は常に競合しており，このように本来現在分詞が用いられた箇所で不定形が用いられるようになる傾向がある．これは純粋に音韻論的な原因，すなわち分詞のアクセントのない語尾が，同化作用と語末音消失の結果単独の不定形の形態に一致したと考えられる．「オトフリート」では sehan と 1 度だけ現在分詞が結び付いている．ところで，この不定形付き対格において不定形の意味上の主語となる対格が表されなかったり，また不定形自体が目的語対格をとる場合があり，意味関係が曖昧になるケースもあるが，敢えてそれを避けようとする努力はこの作品ではなされていない．ただ「オトフリート」の場合，不定形はすべて能動的な意味と考えられている．

不定形が名詞化され，主格・対格・属格及び与格で用いられるものの，ほんの散発的にしか用いられていない．この場合不定形は冠詞・代名詞または付加語形容詞を伴って用いられ，名詞としてはっきり特徴づけられている．また属格及び与格は名詞の語尾を有している．主格は主語として，そして対格は目的語として用いられることは言うまでもないが，属格は名詞の属格のように動詞の目的語，形容詞の補足語そして名詞の付加語として用いられ，また与格は前置詞のみと用いられる．現代語ではこの用法は全く普通に用いられているが，それは単独の不定形の領域がかなり狭いものとなったからと考えられる．

さて最後に zi 不定形であるが，「オトフリート」では名詞化された不定形と同様に与格の語尾を持って現れ，名詞と見なされている．ゴート語で，この前置詞付き不定形（du 不定形）は，単独の不定形と比較するとそれを支配する語とより緩く結び付いており，補足語ではなく副詞的規

定語として，意図や目的を表していた．しかし両者の境界がはっきりしていたわけではなく，ゴート語でも補足語として用いられるケースも存在した．「オトフリード」では，大抵が動詞や名詞または形容詞と結び付いたり，文全体の内容に接続し目的や目標を表しており，その点で前置詞 zi の意味がはっきり現れている．zi 不定形が補足語となりうるケースも存在するが，その数は決して多くはない．また，この頃すでに sin や haben と結びつき現代語と同様に独特の意味を獲得している．

「オトフリート」の不定形を見てみるとドイツ語の不定形の本質が見える．単独の不定形の領域はウルフィラの「ゴート語聖書」と比較するとかなり狭められているが，現代語のそれとは大きな差違は見られない．その一方で zu 不定形は，今日構成された形でもって時制や態を明確に表現し，競合相手を単独の不定形だけでなく従属文にまで広げ，その領域を大きく拡大しているのである．